
見渡す世界はどこまでも

蓬餅あんこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見渡す世界はどこまでも

【Nコード】

N5982T

【作者名】

蓬餅あんこ

【あらすじ】

元の世界で異常だった少年はその世界から逃げ出し、別世界で目を覚ます。名もない小さな世界で少年は何を感じ、何を思っ生きてたのか。

*この作品は不定期更新、詳細設定後付です。

*8/21 盛大に修正しました。

o n o n e s - s d e a t h e d (前書)

「死に際に」

僕はゆっくりと息を吐いた。

四角い扉の形に切り取られた光。それを抜けた途端懐かしく暖かい空気が僕の髪を舞い上げた。少し強めの風に眇めた眼を開いて、目に入ってきた風景は記憶の中にある光景とほとんど変わらない。違うことといえば彼女が立っていたその場所に、一本の樹が立っていることであろうか。彼女の代わりであるかのように立つ、一本の樹。

最後に見た時、僕の腰にも届かなかったその樹はもうすっかり大きくなって、大樹といっても良いほどになっていた。

高く切り立った崖の上。吹きぬける烈風に守られたこの場所は僕と彼女だけが知っている場所。暁の光に染まった空が目の前に広がる、美しい場所。

僕は樹かのじよの傍へ行こうと足に力を込める。けれど一歩踏み出したところで膝がカクン、と折れてしまう。倒れそうになった僕を支えてくれたのは、弟子のメデイだった。

ありがとう

そう言おうと押し出した空気は頼りなく、掠れたような音を出しただけだ。唇さえも満足に動かすことができず、ぎこちなくなってしまう。ゆっくりと発音したけれど、余りうまく喋れない。それでも、メデイにはちゃんと聞こえたようだった。なのになんともずんとも言わないから不思議に思っ
てメデイのほうを見ると、今まで見たことがないくらい硬い表情をしている。…メデイの目元が赤く腫れている事に気が付いて僕は何もいえなくなった。

彼女は無言で僕を背負うと樹に向かって歩き出した。僕をしたいことなんてわかりきっているのだろう。かれこれ50年近く一緒に暮らしているのだ。昔のことを思い出しながら、ふと今どういう状態なのか考える。端から見たら異様な光景だろう。小さくて華奢な

メデイが、大人の男性標準サイズである僕をおんぶしているのだから。

僕にはもうメデイにしがみつく力すらない。本当ならおとなしく横になってなくちゃいけないだろう。でも僕は …

死ぬときは、最愛の人の傍で死にたい。

そこに、彼女の魂が無い事なんてわかってる。亡骸もとつくと朽ちて消え去っているのだろう。だからせめて、彼女と立ったこの場所はかで死にたい。彼女の桜の樹の元で。

樹の下までたどり着くとメデイは割れ物でも扱つかのように慎重に僕を下ろした。僕は立つことができるのかどうかも怪しい状態なので、樹に背中を持たれ掛けるようにして座る。自然と日に顔を向けているようになった。

背中からひんやりと樹の温度が伝わってくる。とても心地がいい。目の前には、赤く染まった空と照らされた大地。ここからは僕の生まれた場所を見ることができると。

僕がこの世界に生まれた場所。初めて世界を感じた場所。

目覚めたばかりで、子供だった。ありもしないことを恐れていたあの頃。

僕の脳裏に、鮮やかな記憶が蘇った。

no no no s dead read (後書き)

心情つてあつめにくくあつね...

a s c e n e (前書)

「風景」

a scene

初めて見たその世界は見たことが無いくらい鮮やかで、美しく輝いていて、清らかで ……

言葉じゃ、とても表現できないほど。

僕には素晴らしく感じられたんだ。

「夢じゃないのかと疑った。」

夢の中でなら、どんな体験でもできるから。

どんな景色でも見ることができるから。

寝ている間しかその幻想は続かないけれど、目を覚ませば曖昧な記憶に成り下がってしまうんだろうけれど。

夢を見ている間は、その景色の中にいられるから。

汚いところの無い世界なんてないのだからうけれど。
美しいばかりの世界なんてないんだらうけれど。

どんな世界でもふとした風景を綺麗だなと感じることはあるの
でしょう。

でも、僕は ……。

僕の昔の記憶は擦り切れて、ここに来るまでにどんな景色を見て
何を感じたのかももう思い出せない。

けれど、これは確かだ。

僕が生まれて、育ったその世界を。一度目の死を迎えるまで見続

けたその世界を。

僕は一度も、一瞬でも、美しいと思ったことが無かった。

どんなに綺麗な自然も、どんなに整った町も、僕には酷く汚れていて、不快なものに感じられた。

僕の周りにいる人　近所の人も、クラスメートも、先生も、家族でさえも。

僕には醜く歪んだものに感じられて。

いつもその世界は僕を不快にさせて

…

歪んでいたのは僕なのかもしれない。

不快の原因も、汚れの原因もきつと。

彼らにとって　その世界にとって異物は僕だったのだろう。

だから、僕は逃げ出したんだ。

その不快な世界から。自分が生まれ育った世界から。

僕を認めない世界から。

8

夢の中ではすぐ現実に追いつかれ、連れ戻されてしまう。だから、追いつかれないように。

そう思って。

永遠に、覚めないように。

そう、願った。

壊れた体を捨てて。

魂の輪廻を抜けて。

世界の境目を超えて。

行く先も考えずに。

無我夢中で、逃げ出した。

それで…その後は　…。

眼を覚まさないことを願って、逃げたのに。

僕は世界から逃げ出した卑怯者だったのに。

僕は、異常だったのに。

どこまでも無垢な、この世界はあっさりと僕を受け入れて。

体は世界に捨ててきた。なのに。

その時、目の前にあった景色は、確かに自分の体で見たもので。

肌をなでる風が、鮮やかな光が、ひんやりとした大地の温度が、

吸い込む息の湿り気が …

あらゆる感覚が、感じられて。

それはまるで夢のように、理想郷であるかのように美しいのに。

いつまで経っても現実^{いま}は追いかけてこなかった。

全身を巡り廻るような、世界^{いま}に。

僕は、一瞬で心を奪われたんだ。

a s c e n e (後書き)

綺麗な表現のしかたってわからない…

1・first forest(前書き)

「最初の森」

1 . f i r s t f o r e s t

ぼんやりと開けた目が最初に映したのは信じられないくらい透き通った蒼い空。そして、それを切り取るようにある木々の葉だった。森の冷涼な空気は思考をだんだんはつきりとさせて行く。吸い込んだ息はとても新鮮で、体の隅々まで浄化されるようだった。肌には草があたっているのか、風が吹くたびにちくちくする。

… 森？

知らない場所だ。

少なくとも、僕の記憶にはこんなところは無い。

こんなに澄んでいて、こんなに輝いている世界なんて。もっと黒ずんでいた。こんなに透き通っていなかった。

どうして、僕は此処にいる？

此処は、何処なんだ？

起き上がろうと腕に力を込めるとほんの少し、腕が震えた。まるで長い間寝ていたかのように。うまく体が動かない。それでも何とか起き上がると、目から水滴が零れ落ちた。まるで、生れ落ちたばかりの赤ん坊のように。

咄嗟に手を上げて拭う。そして、驚いた。

ないのだ。在ったはずの傷跡が。手だけでも12箇所はあったのに。

それに、こんなに色白だっただろうか。

急に恐ろしくなり体のあちこちを確かめる。

まず、髪が長い。そこら辺の女性よりもよっぽど長い。腰の辺りまでありそうだ。その上、手入れされているように美しい。さらには、あれだけあった傷跡が、折れて歪んだ骨が、動かないはずの右

足が、何事も無かったかのようになっている。いや、それ以前に…
僕は、死んだのではなかったか？

最後に見たのはほとんど離れていく悪趣味な、歪んだ笑みを浮かべた顔と霞んで色褪せた空。

記憶が鮮明に蘇る。そうだ、僕は … 学校の屋上から落ちて、地面に激突して、それで、死んだ。

なのに、なんで僕は存在している？

手も、足も、自分の物のように動くし、心臓だって僕の心を表すように鼓動を早める。

なんだこれは。

本物のように精密なのに、本物ではない。

今までの傷跡（れきし）が何一つ無いことで、自分の存在が嘘のように思えて、息が詰まる。

自分の記憶。存在。それが本当なのか、わからなくて。

僕は … 存在しているの？

世界から、いなくなることを望んでいたのに。

存在しないことが、こんなに恐ろしいなんて、誰が思うだろう？

誰かに、僕を見て欲しい。認識して欲しい。

今の僕は、僕を信じることができないから。

誰かに …

… 『リユータ』 …

僕の名前。

安瀬竜太という、名前。

唐突に、伝わってきた音は声ではなく。

あえて言うなら、思考だった。言葉にできない、形のない思考。

僕の思いを読み取ったかのように、それは優しく僕の心に触れて、

僕がいることを教えてくれる。

たったこれだけのことで、酷く安堵した。

僕が落ち着いた後もそれは優しく心を撫でる。微かに残った記憶の中の母親のように。

顔を上げるとそこに色が浮いていた。暖かい光。淡く透けたそれは人ほどの大きさで、表情はわからないが、何を思っているのかはすぐにわかった。

伝わってくるのだ。感情の揺らぎが。

それは手と思われる部分を伸ばし、するりと僕の頬を撫でる。肉体的には触られた感じはしなかった。けれど触られたのは感じた。

ふと気が付けばまわりにたくさんのおそれらが集まってきた。同じ色はひとつとしてなく、大きさも小指サイズから人間サイズまで様々だった。それらはみんな僕のほうに意思を伝えてきて、少し混乱してしまっただけだ。

たった一つ、一番大切なことは理解した。

彼らはみんな、僕を愛してくれているということ。

とても不思議で、とても違和感があったけれど、伝わってくるものは皆一様に優しく暖かくて。

それだけで僕は彼らを信じた。彼らを、愛しく感じた。

一時はどうなることかと思ったが、何とか状況把握することに成功した。彼らと意思疎通ができるのなら、色々教えてもらおうと試しに質問してみたのだ。

彼らはすぐさま答えてくれた。だが、みんな一斉に伝えてくるものだから、頭が痛くなってしまった。

お礼を伝えながらも、できれば一人ずつ話して欲しいことも伝え、さらに質問をした。

その結果、わかったことは今いる世界は天国でも地獄でもなく、

前の世界で言う異世界に当たるものであること。

僕の魂はこの世界にたどり着いて、魂に合った肉体を手に入れたこと。

この世界はエルフやドラゴンがいて、魔法も存在する、いわゆるファンタジーな世界だということ。

彼らは精霊と呼ばれる存在であるということ。

そして、僕が起きるまで世話をしてくれていたのは彼らだということ。彼らは、僕のことを家族のように思ってくれていること。

とまあ、こんなところだろうか。

何故、彼らはこんなにも愛してくれるのかはわからない。けれども理由なんでも良かった。

愛されているということは、僕の存在を認めてくれることだ。だた嬉しかった。それだけで、僕は生きようという意志を持った。積極的に行動したことなんてほとんどしたことはないけど、きつと大丈夫だろう。精霊^{かれら}達は物知りだから、わからないことがあったら聞けばいい。

さて、どうしたものか。

これだけ情報がそろえば、この後の方針も決められる。…たぶん。とりあえず…服が欲しかった。

一糸纏わぬ姿、というんだらうか。つまりは素っ裸なのだ。

今いるこの場所は精霊の森と呼ばれていて、文字通り精霊がよく集まる森なんだそう。そのため霊力やら魔力やらが濃く、此処でしか手に入らない鉱石や薬草があるとか。

その上、精霊自体が目当てで来るものもいるそうで大変人気の在る採集スポットなんだとか。

で、そんなところに僕は全裸でいると。

完全に変質者だらう。女性なんかと鉢合わせた日には羞恥心で死

ねる。ずっとこの森に隠れて彼らと暮らすのもいいのだけれど、それだと彼らに頼りきってしまいそうだ。

いつかは絶対、この森から出なくてはならない。

人と、会わなくてはならない。

途方もない恐怖が湧き出てくる。考えるだけでも震えそうになるのはどうしてだろう。

この世界なら、僕は人として生きられるかもしれない。

生まれたその期待が潰されるのが怖かった。

1 . f i r s t f o r e s t (後書き)

短
い
い
い
い

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5982t/>

見渡す世界はどこまでも

2011年8月21日03時14分発行